

# 風景の中で ⑦



## デーケンさんの死生学

図書館長 井上 郷子

この夏、酷暑の故か、知人、友人を続けて亡くしました。20代で出会い、その後は昭和、平成、令和と、お互い別々の人生を歩み、ようやく尾根歩きを楽しめるようになるわね、また会いましょう、などと話していた矢先、彼らは突然姿を消してしまいました。

一般的に、少なくとも数年に一度は地震や水害などによって、死は身近なものとして感じられるようになるのですが、この半年間は、新型コロナウイルスによってもまた、同様であったことと思います。

9月6日には、カトリック司祭、哲学者のアルフォンス・デーケンさんが亡くなりました。1980年代から「死への準備をすることは、よりよく生きること」という言葉に象徴される、日本では聞き慣れなかった「死生学」を唱え、上智大学で「死の哲学」の授業を初めてして長い間教鞭を執られた方です。このころ、もしかしたら死生学のちょっとしたブームがあったのかもしれませんが、デーケンさんの言葉はしばしば聞かれるものでしたし、今は当たり前のように話される「quality of life と quantity of life」について深く考えさせられるほど、彼の思想は当時、新しかったのです。私はちょうど父を

亡くした頃で、彼の言葉にしばらく立ち止まるが多かったことを覚えています。

デーケンさんはまた、「死には4つの側面がある」と言い、日本語での「死」は、ほとんど肉体的な死を意味するが、それだけではない、生きる意欲を失う心理的な死、病を患ったときに寄り添う人がいない社会的な死、文学や音楽など心の潤いを感じる生活ができなくなる文化的な死、そして肉体的な死、という、死の4つの面を指摘しています。そうすると、このコロナ禍の中、芸術に携わる多くの人々が、世界的に沈没しそうな音楽や演劇などの営みを何とか死守しようとしていたのは、生きる上での必然だったように改めて感じます。SNSを通じてより社会に開いていった人もいれば、ひとりで自身に向き合い、黙々と自分の技量を磨き続けた人も多かったでしょう。

生きている限り、私たちには喪失体験が必ず付きまといまいます。切れ目なく続く日々の中で、一年に一度くらいは走ることを中断して、生きることと死ぬことについて考えるのもよいかもしれません。

『生と死の教育』 岩波書店 請求番号●J137-177

# 資料の部屋 ⑦



## 吹奏楽スタディスコア 新登場

図書館員 岡本 さやか

今回は、最近図書館で所蔵を始めた楽譜をご紹介します。

オーケストラ・吹奏楽など大編成の楽曲の楽譜はたくさんのパート譜があり、収納スペースや管理の面でも、授業・研究のためという利用目的の面でも、図書館資料に不向きなところがあるため、当館では収集対象になっていません。研究の際などはやはり楽譜を見たいものですが、演奏用のレンタル楽譜しかなく図書館で購入できないということもありますし、スコアのみでの出版が多いわけではないのも悩みの種です。

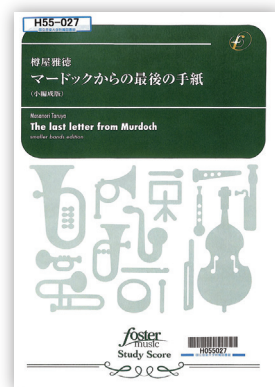
今年度収集を始めた、フォスターミュージック社のスタディスコアは、同社で取り扱っている楽曲から、スコアのみを縮刷版のスタディスコアとして出版しているシリーズです。解説や作曲家プロフィール、音源の情報などのページがあるのですが、委嘱について記載されている作品もあり、様々な団体からの委嘱により、コンクールや演奏会など様々な機会に作・編曲されたことが伺えます。

また、通常版のほかに小編成版など、異なったバージョンが出

版されている楽曲もあり、比較研究もできる点がいへん興味深いところです。小編成の吹奏楽について研究したい、教育実習などで指導の予定がある、編曲法を比較したい…など、さまざまなケースで活用できるのではないのでしょうか。

今後も引き続き収集予定ですので、日本の吹奏楽のシーンを垣間見ることができるかもしれません。

出版や流通が多様化する現在、研究したい作曲家・ジャンル・テーマなど、当館に資料がないということもあるかと思えます。そんなときは、「購入希望」という制度でリクエストを受け付けています。館内のポスターを参考に、カウンターに申し込んでください。



おかもと さやか ●